終戦記念特集

語られなかった史実 引き揚げ女性の悲劇

8月15日は終戦記念日です。終戦から67年がたった今なお、戦争による被害と闘っている方々がいます。私たちは両親や祖父母が経験した悲惨な過去を繰り返してはなりません。

終戦後、国外から600万人以上の引き揚げがありました。非道な行為を受け、大きな心の傷を負った引き揚げ女性についてお伝えします。

※史実をお伝えするため不快な表現が含まれています。

写真）佐世保港に着いた引き揚げ者。この港で、主に中国大陸や南方諸島から1,396,468人が、引き揚げの第一歩を踏んだ。（写真提供：浦頭引揚記念平和公園引揚記念資料館）

写真上）舞鶴港で、出迎え者と喜びの手を振りかわす復員軍人。舞鶴への引き揚げ者の約７割が旧軍人だった。
写真下）舞鶴港へ到着した、樺太・真岡からの帰国者を乗せた引き揚げ最終船白山丸。昭和３３年９月舞鶴の引き揚げの歴史はここで終わった。
（写真提供：舞鶴引揚記念館）

地図）赤の部分は満州の領土。当時の大日本帝国および中華民国、ソビエト連邦、モンゴル人民共和国、蒙古連合自治政府と国境を接していた。

満州国

ロシアの侵攻を受けていた満州は、おおよそ中華人民共和国の北東部を指す。

日本は、日露戦争の勝利から満州に権益を持ち、これを保護するために関東軍を置いた。昭和7年に満州国が建国されたが、裏で日本が軍事力で中国東北三省を植民地にしていた。

当時、昭和一桁の時代は、世界的な不景気の時、『泣く子も黙る関東軍』ともいわれ、この下で、日本企業や開拓農民などが、大挙して海を渡った。

ソ連軍の侵攻

昭和20年8月9日早朝、ソ満国境では、ソ連軍が侵入し、関東軍は後退した。

終戦後武装解除し投降した日本軍捕虜およびソ連軍が逮捕した日本人のシベリア抑留は、59万余人で5万5千名ほどが死亡したといわれている。

ソ連軍の満州侵攻で、一番に避難を開始したのは、軍人軍属の家族、次に満州鉄道や都市部の企業の家族、次が満蒙開拓団の人たちといわれている。

最も悲惨だったのは、満蒙開拓の人たちで、32万余の内、7万8千余名が帰国しなかった。

6月、対ドイツ戦を終えたソ連軍が、極東に向けて兵員の大輸送作戦を開始していたことは知られていたが、軍は、各地に散在する開拓団に知らせなかった。ソ連軍の機甲部隊から徒歩での避難となり、男手は日本軍の兵隊に召集されて、老人婦女子には中国人民15年抑圧搾取の報復が加えられた。

引き揚げ女性の悲劇

朝鮮や満州からの引き揚げ時に女性は、ソ連兵や中国人から辱めを受けるのを防ぐため、青酸カリを持たされていた。万が一のときは、自決せよということだ。ソ連兵は応じないものは射殺していたともいう。

ソ連兵や中国人・朝鮮人の略奪と暴行は、残酷を極めた。女性への暴行は一度では済まず、相手も変わった。兵隊同士が情報交換をしていて、部隊の移動のたびに新しい兵隊に襲われるのである。ソ連兵に犯され、ついで朝鮮人の保安隊に引き渡されてさらに散々に辱められたうえ、虐殺されたという話もある。

このような、暴行が繰り広げられ、多くの日本人女性が不本意にも妊娠した。

引き揚げ中、将来を悲観し、飛び降り自殺を図る日本人女性が多数いた。当時、堕胎は法律で禁止されていたが、女性たちの悲劇に心を痛めた日本政府は、超法規的に堕胎を認める。

麻酔薬が不足していた為、麻酔無しの手術が行われ、死者も少なからず出た。福岡県二日市保養所にいた医師の証言では、閉鎖まで約500人に堕胎手術を施し、梅毒や淋病などの性病患者も約500人いたという。

このような日本人女性の悲劇の歴史は、決して風化させてはならない。

編集後記

「中国人はブタと同じだ。何でもやってしまえ」と公言した高級軍人は、当時の日本人の対満州観を象徴していると思う。日本支配の満州で死んだ中国人は、日本人の犠牲よりも多いとも聞く。七三一部隊では、3千人以上の人体実験を行い、国境要塞の建設では、労働者を殺害して秘密を守った。日本から略奪と搾取を受けて、昭和19年の冬満州では、食糧は不足し衣類は入手できず、零下40℃にもなる土地で、裸の子供も多くいたという。引き揚げ者の受けた非道な行為についても大日本帝国への恨みが助長したのだろう。

そんな中で、日本人の残留孤児を育てた中国人もいる。また、不本意にも中国人の妻となった方もいる。中国東北部の朝鮮族は、日本の政策で移住させた人たちだ。お互いに非人間的な行為を行い、多大な犠牲者を出す戦争を二度としてはならない。（広報委員会）

黙とうをささげましょう

広島市原爆投下時刻
８月６日午前８時１５分

長崎市原爆投下時刻
８月９日午前１１時２分

終戦記念日
８月１５日正午

INTERVIEW

紙一重だった

高橋清子さん
（土佐山田町中組）

私の父は満州鉄道の食糧倉庫係で、家にはお手伝いがいる暮らしをしていました。

引き揚げ当時私は２歳で、日本人の女の子は親を大事にするといわれ、連れさらわれるため、男の子に見えるように坊主にされたそうです。

父は職場にいたため、母は背中に荷物、前に私を抱くという状態で、人の上に人が乗る満員列車で帰りました。私は父母のところに生まれた一人っ子で、運があったと思う。そうでなければ、中国残留孤児となっていたでしょう。

兄弟のいた家庭では、満州に残された子どもが多くいました。すぐ迎えにこれると思っていた為ですが、１９７２年に日本と中国の国交が正常化されるまで、中国に渡ることはできませんでした。

テレビで残留孤児の映像を見るたびに、もしかしたら自分もあの中にいたかもしれないと思わされます。

▲満州在住時の高橋さん
昭和２０年１月撮影

▼8月1日〜15日まで市役所1階ロビーで『ヒロシマ・ナガサキ被爆の実相等に関するポスター展』を開催します。

保管物件の返還について…税関では、終戦当時に外地から引き揚げてこられた方からお預かりした通貨・証券等をお返ししています。お心あたりのある方はご連絡ください。【問い合わせ先】高知税関支署 ☎ 088−832−6131